

『授業に関するアンケート』のweb実施における成果と課題2：学生対象の調査より (報告)

Web-based Student Course Surveys: Advantages and Drawbacks from the Viewpoint of Students

高木 邦子

文化政策学部 国際文化学科

TAKAGI Kuniko

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

林 在圭

文化政策学部 国際文化学科

LIM Jaegy

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

2018年度からwebでの実施に移行した本学授業評価アンケートの成果と課題について、学生を対象としたアンケートの結果を報告した。授業アンケートのweb実施を支持する学生は54%、紙実施を支持する学生は19%とweb実施の方が多くの学生に受け入れられ、その理由として、時間や場所を選ばず回答でき、手間を削減できるといった長所が指摘された。web実施の課題としては回答をし忘れること、接続環境によって回答しづらいことが挙げられたが、本学のWi-Fi環境は現在改善の途上であるため今後より利便性が高まることが期待される。

授業アンケートの結果と教員のコメントがwebで公開されていることの周知と結果へのアクセスは2017年の調査結果よりは増加したが、更に高める余地はある。また結果をwebで公開することに対する意見は86%が肯定的立場であり、教員からのフィードバックを歓迎する意見が最多であった。だがその反面、授業アンケートへの無関心がうかがえる記述も散見された。授業アンケートの結果を踏まえて教員と学生のコミュニケーションが増えることで、相互の授業アンケートに対する意識がより高まることが期待される。

This paper reports on student opinions concerning a web-based system on university student course surveys in 2018. According to student answer, 54% of respondents were in favor of web-based course surveys, while 19% preferred the previously used paper survey. The advantages of the web-based surveys were that they could be answered anywhere and at any time. However, some of the drawbacks were that students often forgot to answer them and they could be difficult to answer in places where the internet connection was weak.

The number of students who were aware that the web-based survey results would be published online and were able to access them was higher in 2018 compared with 2017, but there is still much room for improvement. The large majority (86%) of students responded positively to the online publishing of the student course survey results, indicating that they welcomed feedback from teachers. However, some of the student descriptions indicated indifference about the course surveys. It is hoped that greater reflection about survey results will help foster better communication among teachers and students about the process of learning.

1. 問題と目的

本学では2018年度前期より「授業に関するアンケート（以下「授業アンケート」とする）」がLMS（Learning Management System）であるSUAC-manaba¹を介した実施へと移行した。これを受け高木・林・野村・平野（2018）では、手続き、結果の概要について前年度のマークシート実施との比較を行い、さらに教員対象のアンケートで得られた教員の所感を報告した。結果、web実施移行の成果としては実施手続きの簡略化、即時性・処理の迅速性といったスピード、アクセシビリティの高さといった利点が示された一方で、回答率と信頼性向上の課題およびそのための教員・学生双方の意識向上の手立ての必要性が指摘された。

だが、高木ら（2018）では教員の意見は示されたものの、学生の意見収集はなされていなかった。そこで本報告は学生を対象としたアンケート調査を実施し、授業アンケートのweb化について学生の視点から成果と課題を示すことを第一の目的とした。

ところで、授業アンケートが形骸化しないためには、回答する学生にとって「アンケートに回答する意義」が理解

され、生産的な情報が教員に提供されること、そして教員が学生の意見に応えること、という相互性が必要である。学生にとっては自身が回答したアンケートに対して教員からの反応がある方が、その授業への動機づけを高めやすいこと（鳥巣・佐々木, 2005；坂本, 2005など）や、アンケートに対するフィードバックを授業内で行うことで学生がアンケートの意義を理解し好意的に受け止めること（中島・長濱・中山, 2013）などが指摘されている。こうした知見を踏まえると、授業アンケートの結果を受けた教員からのフィードバックは極力迅速に、かつ学生に届きやすい形で公開することが望ましいと考えられる。

ところが2017年に本学教育・FD委員会が実施し、FD情報交換会²で発表された学生対象の調査結果によれば、“授業アンケートの結果を見たことが無い”と答えた学生が回答者の82%にも及んだ。さらに自由記述からは「結果が公表されていることを知らなかった」「どこに結果があるのか」「もっとわかりやすく公表してほしい」といった記述が多数見られ、授業アンケートの結果公表についての周知不足がうかがえた。また、当時は授業ごとのアンケートの回答概要である結果個票はプリントアウトのうえ紙媒体で教員に配布され、それに対する教員からのフィード

¹ 株式会社 朝日ネットによるサービス

² ふじのくにコンソーシアム 平成29年度FD情報交換会 FD活動の取り組み(平成30年2月21日)

バックコメントもまた紙媒体で回収・印刷・製本のうえ事務局や図書館に配架されていた。そのため、アンケート実施から結果の公開までに時間がかかり、仮に学生が結果の公表を知ったとしても、次学期が始まってから配架場所まで足を運んで閲覧する迄には至りにくいことが推測された。

web実施に移行してからは、回答の手間や結果個票、教員コメントといったアンケート結果が公表される迄の期間は大幅に短縮されたうえ、webで公開される結果は学生からのアクセスがしやすくなっている。ただし、アクセシビリティが高まっても、学生がそれらの情報を閲覧しようとしなければフィードバックが届くわけではない。そこで、現状（2018年度以降）、授業アンケートの結果個票と教員からのフィードバックコメントがwebで公開されていることを学生がどの程度知っているか、また知っている場合はどの程度閲覧しているか、さらに、結果個票と教員コメントのwebによる公表に対してどのような意見を持つかを併せて調査する。2019年度前期終了時点では、結果個票と教員からのコメントが公開されている旨は、授業アンケートの説明の際に簡単に言及されるにとどまり、学生に積極的に周知されているとは言い難い。以上から、今後の周知への取り組みの成果を示す起点となるデータを得ることを本調査の第二の目的とする。

2. 方法

手続き

授業アンケートがweb化された2018年度以降にアンケートに回答した経験がある2年生以上の学生を調査対象とした。全学科目および学部・学科専門の授業のバランスを取りながら、2年生以上、さらに紙媒体でのアンケートに回答した経験もある3・4年生が多く履修する授業を中心に担当教員に調査概要を説明して協力を依頼した。承諾を得られた科目の担当教員にはSUAC-manabaで作成したアンケートファイルをメール添付により送付し、担当科目のSUAC-manabaコースにインポートしてアンケートを作成する手続きを説明した。研究者が教室に出向き、授業の冒頭に学生への趣旨説明と回答依頼を行った科目は2科目あり、それ以外は授業担当者から履修学生への教示により実施された。回答期間終了後、担当教員からデータファイルを集約して分析を行った。調査期間は2019年6月末から学期末にかけてであった。

アンケート内容

教示文において、web実施移行にあたり学生の意見を収集するとの調査目的と、現1年生および他の授業で既にこのアンケートに回答した学生は回答不要であることを記した。質問項目は以下のとおりであった。

(1) マークシート（紙）での授業アンケート回答経験の有無：マークシートによるアンケートに回答したことがあるか、「はい」「いいえ」「覚えていない」から選択を求めた。

(2) web実施による授業アンケート回答経験の有無：webでの回答をしたことがあるか、「はい」「いいえ」「覚えていない」から選択を求めた。

(3) 授業アンケート実施法への意見：質問(1)(2)ともに「はい」であった回答者に、どちらの実施方法が良かったか、「紙での実施が良い」「web実施が良い」「どちらも変わらない」「その他」から選択を求めたうえで理由の記述を求めた。

(4) 結果が公表されていることを知っているか：授業アンケートの結果個票と結果に対する担当教員コメントをwebで見られることについて「知っていた」「知らなかった」から選択を求めた。

(5) 結果閲覧の状況：「結果（個票）、教員のコメントともに見たことがある」「結果は見たことがあるが、教員のコメントは見たことがない」「結果は見たことがないが、教員のコメントは見たことがある」「結果、教員のコメントともに見たことがない」から選択を求めた。

(6) 結果をwebで公開することに関する意見：科目の結果個票とそれを受けた教員からのコメントをwebで公開することについての考えを自由記述で求めた。

3. 結果

1) 分析対象者

15名の教員による21の授業でアンケートが実施され、のべ621名分のデータが得られた。このうち学籍番号のスクリーニングにより、2019年6月時点で授業アンケートに回答した経験がないはずの1年生12名のデータを削除した。さらに、「他の授業で回答した場合は回答不要」と教示したにもかかわらず複数の授業で回答した学生データが検出されたことから、タイムスタンプにより初回の回答を残して142のデータを削除した。そのうえで残った467名分のデータについて学籍番号情報を削除し、以降

Table1 分析対象データの学科・学年内訳（有効データのみ）

	過年度生	4年生	3年生	2年生	社会人 聴講生	合計
国際文化学科	5	38	83	71		197
文化政策学科	1	12	49	53		115
芸術文化学科	1	5	32	27		65
デザイン学部	4	7	32	42		85
合計	11	62	196	193	5	467

の分析を行った。学科ごとの分析対象者数をTable 1に示す。

マークシートによるアンケート回答の経験者は、有効回答467名中282名(60%)、webによるアンケート回答の経験者は435名(93%)であった(Figure1, Figure2参照)。

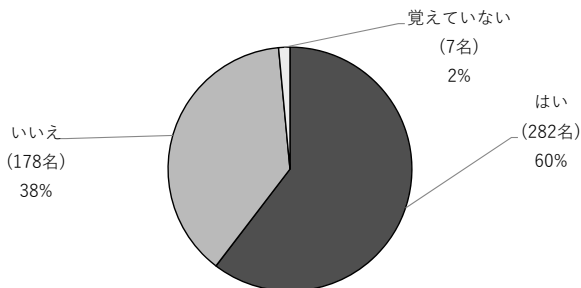


Figure1 マークシート（紙での実施）のアンケートに回答した経験はあるか？

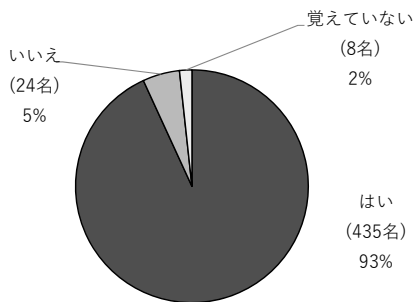


Figure2 webでのアンケートに回答した経験はあるか？

2) 紙実施/web実施に対する学生の意見 どちらの実施法が良いか

マークシート（紙）とmanaba（web）の両方で授業アンケートに回答した経験があると答えた255名について、どちらの方法が良いか選択を求めた結果をFigure3に

示す。約半数の54%（139名）の回答者がweb実施を支持した一方で、紙実施を支持する回答も48名（19%）と一定数存在した。

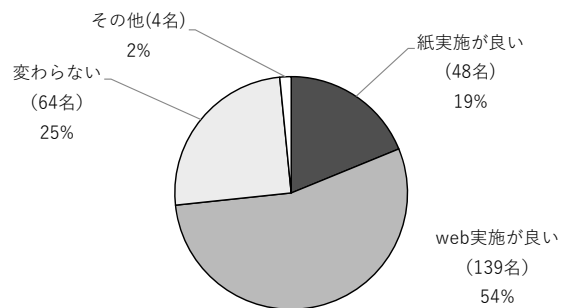


Figure3 紙とwebの実施、どちらが良いと思うか？

その実施法を支持する視点

「紙実施」「web実施」「どちらも変わらない」という選択の理由を述べた180名の記述について大学生アルバイト2名と研究者が協議し、複数の視点を含む記述を分割しながらカテゴリを作成・分類した。支持する実施法ごとの各カテゴリの記述数をFigure4に示す。

web実施を支持する理由では、「配布・実施・回収の手間や労力」に関する記述が最多であった。次に、いつでもどこでも回答できるという「回答のタイミングや場所」、そして「資源の節約」、「授業時間中の回答時間確保」、と続いた。

紙実施を支持する理由として最も多く挙げられたカテゴリは、「回答を忘れる」などの「回答の確実性」、次いでmanabaのシステム、学内のWi-Fi環境、自身のスマートフォンの通信制限などによる使い勝手の悪さに関する「manaba・ネット環境・デバイスの使い勝手」が挙げられた。「回収率」の視点は紙実施を支持する三番目に多いカテゴリであったが「web実施では回答率が低下する」といった趣旨のものが多く、「回答の確実性」と関連すると推測される。

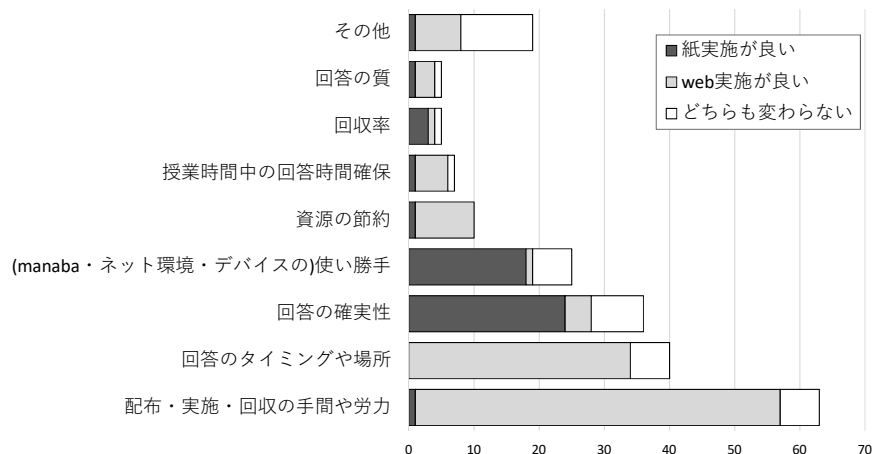


Figure4 紙実施/web実施/どちらとも変わらない とした理由の記述数内訳

紙実施・web実施のどちらも変わらない理由は、「差異を感じない」との意見、授業アンケート自体への関心の低さがうかがえる記述のほか、双方の長所と短所を比較して述べられたものが見られた。この長所と短所をともに述べている記述では「web実施は便利だが忘れやすい」または「Wi-Fiなどの接続環境によって回答しづらい」というように、紙実施を支持する理由とweb実施を支持する理由での葛藤が見られた (Table2)。

Table2 紙実施とweb実施, 「どちらでも変わらないと」した回答者による双方を比較した記述 (原文まま)

<ul style="list-style-type: none"> ・webでのアンケートは手軽でやりやすいが、紙と違って強制でやりづらいため忘れがちになる ・webでの回答は後日別の場所でも回答可能で便利だが、回答率を考えるとその場で実施した方がよい気がする ・アンケートを授業で呼びかけて授業中に記入させてもらえるのであればmanabaの方がやりやすさはあります。しかし、個人で行ってくださいという形式となると回答し忘れてしまったりするのでそういったことを考えると紙の方が良いような気がします ・マークは手間だし時間もかかる。Webアンケートはいつでも回答できるためにやることを忘れてしまう ・紙での実施だとその場にいる生徒全員がアンケートをこたえるが、ウェブでの実施だと手軽でいつでも回答できるが、その反面アンケートをこたえ忘れることがある。 ・紙に書く手間はなくて筆跡でバレることもないが、Wi-Fiが遅く回答しにくい。 ・紙は時間かかるけど、授業後に集めるからちゃんとやる。スマホだと簡単だけど、ネット環境が悪いとやりづらい。後でやっとってっていうとやらない。 ・紙は面倒だけど通信制限かかっているとスマホで開けない。

3) 結果のweb公開に対する学生の意見

結果のweb公開を知っていたか

授業アンケートのwebでの回答を経験した2年生を含む435名を分析対象として、2018年度からSUAC-manabaで公開されるようになった各授業の結果個票と教員からのフィードバックコメントの存在を知っていたかどうかを訊ねた結果をFigure5に示す。半数を超える53%(239名)が結果公開の事実を「知っていた」と回答した。

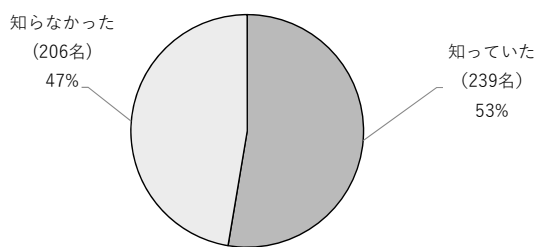


Figure5 アンケート結果 (個票および教員コメント) がmanabaで公開されていることを知っていたか?

公開された結果を見たことがあるか

結果が公開されていることを「知っていた」と回答した239名のうち、アンケート結果 (結果個票) と教員からのコメントを見たことがあるかを訊ねた結果をFigure6に示す。26% (61名) の回答者が「見たことがない」と答えたが、74% (178名) が何らかの結果を閲覧した経験

があることがわかる。なお、Figure6は結果が公表されていることを「知っていた」と回答した学生のうち「見たことがある」学生の比率だが、結果の公表を「知らなかった」と回答した学生206名を併せると、「見たことがない」は全体435名のうち56%になる。結果や教員によるコメントを「見たことがない」との回答が82%であった2017年度調査に比べれば多少はフィードバックが学生に届きはじめているといえるが、周知はいまだ十分とはいえず、さらなる改善の余地がある。

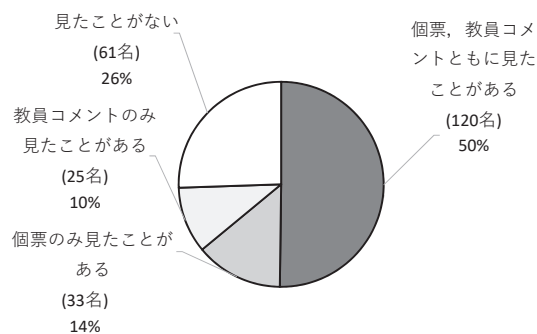


Figure 6 個票と教員コメントを見たことがあるか?

結果のweb公開に対する意見

アンケート結果をwebで公開することに対する自由記述の意見は177名から得られた。複数の内容が含まれる記述を分割して作成した202枚のカードについて、研究者が2名の教員と個別に協議をしながらそれぞれ意見の内容を分類した。

どちらの場合も、まずアンケート結果のweb公開に対する意見と判断できないものを除き、肯定的意見、中立的意見、否定的意見に分けた。その後、各立場の意見についての記述をカテゴリーに分類した。2名の教員と別々に行った分類で共通して作成されたカテゴリーと、同じく共通して分類された記述の数と主な記述内容をTable3に示す。

アンケート結果のweb公開に対する意見の多くは肯定的意見と判断され、カテゴリーに分類された152の記述のうち131 (86.2%) を占めた。なお中立的意見として18 (11.8%) の記述が、否定的意見として3 (1.97%) の記述が分類された。

肯定的意見としては (1) 理由の記述が無いもの (e.g.良いと思います、のみの記述など) が最多であり、理由があるものについては“webでの公表”に対する意見と、“結果の公表”に対する意見が含まれた。従来は結果が公表されていること自体の周知が不十分であったことから、今回はweb実施に移行したことで結果の公表に意識が向いたとしてここでは区別せず論じる。分類された記述が多い順で (2) 教員からのフィードバックが届くこと、(3) 結果へのアクセスのしやすさ、(4) 他の履修生の意見がわかる、(5) 履修の参考になる、(6) 調査の結果は公表すべき、と続いた。さらに (7) 生産的であるならば、というような前提つきの意見であり、肯定的意見を述べつつ課題を指摘しているものを分類した。課題としては結果を公表して

Table3 アンケート結果のweb公開に対する意見のカテゴリーと記述数、主な記述内容

	カテゴリー	記述数	主な記述内容
肯定的意見	肯定（理由記載なし）	45	いいと思う／公開してほしい／公開すべき／とても良いと思うので今後も続けてほしい／賛成です／よいが、コメントしていない教員もいる／よいと思う・今後確認していきたい／これからも続けてほしい
	教員からのフィードバック	24	先生の感じ方がわかると次回に生かしやすい／これからの対策がわかったり、こちらの思いが伝わっているのが分かる／何かしらのフィードバックがあるのは良い／フィードバックがしっかりされていると感じる／生徒たちの要望に対するコメントなのでいいことだと思う。／先生方がどうコメントをするのか気になるから、公開しても良い／意見交換になって良いと思う／回答した以上フィードバックが気になることもある／答えるからには結果や教員の意見もみたい／教員からのコメントが書いてあるのは内容が少し気になるため公開されていてよい／教員から一言あると回答が届いてるんだなと分かって次回も回答しようと思える／一人一人のコメントに対して教員がコメントしてくれるのが良い／授業の改善点を提案した場合、それについて先生方が考えてくれてるかどうかを確認出来る／先生からの意見も聞けて良い／先生方の思いを共有できて良いと思う
	アクセスのしやすさ	19	アクセスしやすい／いつでも見られる／確認しやすくていい／自分では見に行かないから／わざわざ図書館に行って結果を見なくてもよいので便利／わざわざ掲示されているのを見に行くことはなかったので、気軽に結果が見られる／ネット環境と端末があればいつでも確認できる／気になる人にとっては自由に見られる／興味のある人は自由に好きな時に見られる／いつでもどこでも見たいときにチェックすることができる／どこでも見れるしなくさないのがありがたい／見たい時に気軽に見られる／紙によるアンケートの結果をどのように公開していたのかわからないのですが、manabaなら結果が気になった場合、気になったときにすぐに、手元で確認できる／紙アンケートの時はどこに結果やコメントを閲覧しに行けばいいのかわからない見に行くことはなかったのですが、manabaで公開されるようになってからは1つ1つ見るようにしています。
	他の履修生の意見がわかる	14	他の履修者の意見も気になるので／他の人がどのような評価をしているのかなど気になるから／自分だけがその授業を良かった、良くなかったと思っている訳では無いと分かる。自分の能力不足なのか、先生の授業スタイルがよくないのか分かってよい／自分以外の人が授業に対してどう感じていたかわかるので
	履修の参考	7	その授業をとるかどうかの決め手にもなる／履修しようと思う人の参考になる／次の授業選択のヒントになって良い／履修登録するときに授業選択に役立つと思う
	調査結果は公表すべき	7	全部隠さずちゃんと公開してくれてる方が信頼できる／アンケートに答えた以上、結果を開示する義務はあると思う／結果が気になる人もいると思うので／調べて終わりではなく、結果やコメントを公開するのは良い
	条件付き肯定	6	授業がよくなるのであればいい／何らかの生産性があれば良い／次に改善されていればやる意味はある／いいと思うが、結果が見づらい／良いと思うが、公開されていることが分かりづらい／良いと思うが、教員のコメントが質・量、共に低すぎる。提出する意味が分からない。少なくとも現状の10倍の量が教員のコメントに必要なのでは？
	授業の改善につながる	5	授業の質の向上に繋がる／今後の授業に生かせる／今後の授業を良くするために必要／不満があった際にその改善や回答してくれる
	肯定するが見ない	4	いいと思うが見ない／良いとは思いますが。ただ、公開されても見るかなあと思うのが正直なところですが／効果はあるかもしれないが、授業が終わったらアンケートの結果を見ない学生の方が多いと思う。
中立的意見	無関心	12	あまり興味がない／特に関心はない／特にどうも思わない／どうも思わない／なんとも思わない／どちらでもいい／これとって思うことはない／あまり学生は気にしてないと思う／閲覧期間を逃してしまうので、どちらでもいい／私が去年受けたものと同じ授業を今年受ける後輩の話を聞いていると、アンケート自体教授がこれからは反映している感じがしないので意味がないし特にどっちでもいい
	問題は無い	6	問題ないと思う／問題ない／公開することは問題ないと思います／私は一向にかまいません／特に異議なし／マイナスの印象はない
否定的意見	アンケート自体または結果の公表が不要	3	アンケート自体あまり必要だとは思わない。／公開することに意味はあるのでしょうか。生徒が次年度に受講する際の指標になるということですか。見たことがないのでなんとも言えませんが、「こう改善する」等生徒が見ても、とは思いますが。／教員側からのコメントは見たことがないため公開する必要もないと思う
	合計記述数	152	

いることの周知や結果表示の視認性、教員のコメントの質の問題などが指摘された。また、授業アンケートの目的である(8) 授業改善に繋がる、という記述もカテゴリーとして作成されたがその記述数は多くはなかった。最後に、

(9) 結果のweb公開は客観的には良いこととしながら「自分は見ない」「見ない学生が多いと思う」といった肯定的意見はあるが結果への関心の低さがうかがえる記述が分類された。

中立的意見としては、(1) 興味がない、といった無関心さがうかがえる記述と、(2) 積極的賛成ではないがアンケート結果の公表に対して「問題はない」とする記述がみられた。コメントの数も理由を詳しく述べている記述も少なく、積極的な理由で結果のweb公表に中立的な立場を示すというよりは、授業アンケートに対する無関心がその中心であるのかもしれない。

否定的意見では、授業アンケート自体の意義に懐疑的であるためwebでの結果公表に意義を認められない、また結果の公表に意義を認められない、という理由が述べられていた。こうした否定的意見は、授業アンケートに意義を見出せないという点では肯定的意見でみられた「肯定的意見はあるが結果への関心の低さ」のカテゴリーや、中立的意見でみられた「無関心」と近い立場とみることもできる。

4. 考察

1) アンケートのweb実施に対する学生の評価

紙での実施とwebでの実施の両方を経験している学生による評価では、54%と半数強がweb実施を支持していた。どちらも変わらないとの回答が25%、紙実施を支持する回答が19%であったことを踏まえると、紙実施よりはweb実施の方が学生に肯定的に受け入れられているとみることができる。

2) アンケートweb実施の成果と課題

実施方法についての意見

web実施を支持する理由としては、時間や手間などのコスト削減についての言及と、時・場所を選ばず回答できるというアクセシビリティに関する記述が目立った。一方、課題としては「回答の確実性」、デバイスやシステムなどの「使い勝手」、次いで「回収率」が挙げられた。これらの側面はいずれも高木ら(2018)による教員視点からの成果と課題の指摘とも一致する。

ところで、web実施の課題として挙げられた「回答の確実性」「使い勝手」「回収率」の三つは相互に関連していると考えられる。回答率を高めるために授業に関するアンケートでは必ず授業中に回答時間を取るという大学は多い。現在本学でも基本的には授業中に回答時間を設けることが周知されているが、2019年度前期までは大学内のWi-Fi(SUAC Wi-Fi)の接続にトラブルが多く、授業アンケートの実施要項において、その場で回答できない学生に対して授業時間外での回答を指示するよう記載されている。そのため、その場でWi-Fiに接続できなかった学生が後で回答するつもりで失念しやすかった可能性が推測できる。

2019年度後期からはSUAC Wi-Fiの接続がそれ以前よりスムーズにできるようになり、またWi-Fiが利用できる

教室も増加していることから、これらのweb実施による課題がハード面の改善である程度の解消に至るものであれば、回答率・回収率の向上が期待される。もちろんその前提として、必ず授業中に回答時間を確保すること、そして大学から、または授業担当教員から回答を促す声掛けを丹念に行うことも必要である。

結果のweb公開についての意見

結果個票と教員からのコメントをwebでフィードバックしていることは、47%の学生が「知らなかった」と回答した。アンケート結果のwebでの公表を「知っていたが見たことがない」学生と「知らなかった」学生をあわせると、分析対象となった学生の56%となる。2017年の調査では学生の82%が授業アンケートの結果を「見たことがない」と回答していたことから、webで公開されたアンケート結果を「見たことがない」学生の比率はweb化後の現在26ポイント減少している。だが依然として半数以上の学生にはアンケートの結果が届いておらず、いまだ「コメントが読めることを知らない」といった訴えも多いことから、学生が関心を向けるようなフィードバックの在り方の検討や周知の努力が必要であろう。

授業アンケートの結果をwebで公表していることについての自由記述には肯定的なコメントが多く、その理由には教員から反応(フィードバック)があり双方向性が感じられること、アクセシビリティの高さなどが多く挙げられた。

だが一方では、肯定的意見・中立的意見・否定的意見いずれの立場のコメントにおいても授業アンケートへの無関心や意義を見いだせていないことがうかがえる記述が散見された。さらに、「無関心」に分類された「(アンケート結果が) 授業に反映されている気がしないので意味が無い」との意見や、教員のコメントを読んだことがある学生からは「教員により回答に差がある」「コメントを書いていない教員がいる」「翌年本当に改善されていると思えない」といった教員の姿勢に対する厳しい意見も寄せられた。

「問題」でも述べたとおり、授業アンケートへの教員の姿勢は、学生のアンケートに対する姿勢に影響する。教員が授業アンケートを活かしていないという印象を学生に与えてしまうと、学生側のアンケートに対する動機づけが低下して回答率の低下やいいかげんな回答の増加に繋がるかもしれない。その結果、教員はますますアンケート結果を軽視する、という悪循環に陥る恐れもある。回答率向上や生産的な回答を得るためには、教員が授業アンケート結果を真摯に受け止めていることを学生に伝える必要があるのかもしれない。これは学生からの要望を全て聞き入れるということではなく、得られた結果や意見について学生と対話をすることで果たされるのではないだろうか。

本学では授業アンケートの実施時期が学期末であることから、全ての授業を終えた学生にとって授業アンケート結果への関心は高くないことが予想される。教育評価の「形成的評価」としてならば授業期間の途中でアンケートを実施するという案もあるが、アンケートのweb化が始まり、またアンケート項目も改訂されたばかりの現状を踏まえると、本学での授業アンケート実施時期の大きな変更はすぐ

には困難かもしれない。

だが、現状でも授業アンケートの実施期間に数週間の幅があること、またweb化により集計の即時性があることから、やり方によってはアンケート実施期間開始早々に授業アンケートを実施し、終講までに学生との対話や教員の考えをフィードバックすることは可能である。教員が意義を見出せずに「やらされている」授業アンケート、学生も意義を見出せずに「書かされている」授業アンケートにならないためにも、各教員が授業アンケートをどのように活用するか模索することが求められよう。

引用文献

- 坂本健成 2005 ファカルティ・ディベロップメントとして効果的に授業改善を行うためのリアルタイム授業評価実施の提案 流通科学研究, 4, 71-82.
- 高木邦子・林 在圭・野村卓志・平野 剛 2018 『授業に関するアンケート』のweb実施における成果と課題 静岡文化芸術大学紀要, 19, 121-144.
- 鳥巢泰生・佐々木英洋 2006 リアルタイム授業評価システムを活用した授業改善(3) 大手前大学論集, 6, 123-149.
- 中島 誠・長濱文与・中山留美子 2013 授業評価へのフィードバックを授業時間中に実施する効果 大学教育研究 三重大学授業研究交流誌, 21, 63-68.

